

資料

ドイツ教養小説研究の現在 (3)

—— オルトルート・グートヤール著『教養小説概説』 ——

林 久 博

本稿は、オルトルート・グートヤール著『教養小説概説』(Ortrud Gutjahr: Einführung in den Bildungsroman, 2007) の内容紹介の3回目である⁽¹⁾。今回は第5章「ジャンルの歴史」を要約し紹介しておく。ここでは教養小説が「男性的教養小説」「女性的教養小説」「インターカルチャー的教養小説」の三つに分けられ詳述されている。

.....

・ ジャンルの歴史

1. 男性的教養小説の伝統と聖典化

ゲーテ (1749-1832) の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795/96) は19世紀には教養小説の雛形へと高められることになったが、『修業時代』以前の小説も Bildung というテーマ性との親近性から吟味され、このジャンルの「前形式」と見なされた。こうした小説群に例えばヨーハン・ゴットリープ・シュメル (1748-1813) の『ドイツへの感傷旅行』(1771/72) を数え入れることができる。この小説はローレンス・スターンの『フランスとイタリアへの感傷旅行』(1768) を参考にしたものである。18世紀後期の他の小説では、主人公の社会的な上昇において、教養小説へと近づいていく様が見られた。例えばシュメルの『ヴィルヘルム・フォン・ブルーメンタール』(1780/81) である。ここで描かれているのは、あるドイツの小都市での貧しい出発点から、イギリスでの国務において高い地位を受け継ぎ幸福な結婚へと至る、幼くして孤児となった小市民の息子の経歴である。ヨーハン・カール・ヴェーツェル (1747-1819) の『ヘルマンとウルリーケ』(1780) では、収税吏の息子がいる伯爵から援助を受け、教育・試験・冒険的な過ちの段階を潜り抜け、身分の高い恋人と結婚する。その社会的な立場を改善するだけでなく、さらに失敗から今後の人生計画のための結論を導き出す主人公が中心に据えられるという点で、すでに教養小説の基本的な雛形が繰り広げられている。

ヴェーツェルの『ヘルマンとウルリーケ』は当時非常に成功し、クリストフ・マルティン・ヴィーラント (1733-1813) から評価されたにもかかわらず、ヴィーラントの『アガトン物語』 (1766/67) だけが模範的な教養小説の聖典として採用された。なぜならここでは特に、これまでのドイツ文学では見られない「人物の *Ausbildung* と *Formung*」⁽²⁾ がテーマとなっていたからである。それゆえに、ヴィーラントの作品はすでに 19 世紀前半には「最も優れた教養小説のひとつ」⁽³⁾ として分類された。それに対して、「この様式の最も優れたもの」⁽⁴⁾ が取り上げられており、「*Bildung* の歩みが完全にプログラム通りに」⁽⁵⁾ 繰り広げられているという解釈者たちの統一的な見解のおかげで、ゲーテの『修業時代』はこのジャンルの雛形として聖典化された。ゲーテの小説においては、ある単独者 (*der Einzelne*) が有機的な発展の中で公益のために活動する調和的な個人 (*Individualität*) へ向けて自己を形成するという古典主義のイメージが理想的な方法で満たされていると見なされた。主人公のヴィルヘルムは自己を父親の職業観から解放し、劇場で自己を試し、最終的には改革派の地方貴族のグループの中に一人の女性を見出すことによって、自らの *Bildung* の歩みを完成させる。こうした発展に由来して教養小説というトポスも決定されるのであるが、このトポスには、与えられた生き方を克服するものとしての旅、エロティックな試みの競技場としての女性たち、家族の責任を守る女性たち、芸術との対決などを数え入れることができる。ゲーテはもともと『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』というタイトルでこの小説を計画しており、主人公は彼本来の *Bildung* を劇場で経験することになっていた。しかしながら、カール・フィリップ・モーリッツ (1756-1793) と知り合い、彼の『アントン・ライザー』 (1785-90) を読んだことで、ゲーテは根本的に自分の計画を変更した⁽⁶⁾。「演劇小説」に対するモーリッツの批判がゲーテを改稿へと向かわせたのであった。

ゲーテの教養小説を見本にする限り、モーリッツの心理学小説『アントン・ライザー』はこれまでアンチ教養小説と呼ばれてきた。なぜなら主人公が希望した人生行路は挫折し、*Bildung* の理想が示されないからである。ここで描かれているのは、貧しい境遇の中で喧嘩の絶えない両親に挟まれて身を擦り減らしながら成長し、本の世界へ逃避することによって抑圧された生活環境から自らを救うことのできる主人公の発展である。帽子職人のもとでの屈辱的な修業時代の後、この才能のある若者はエアフルトの貧民学校で庇護される。ある同級生によって演劇への情熱が湧き上がるが、演劇で成功を収めるという彼の計画は崩れ去る。この作品は教養小説群の中では特殊な地位を占めている。この小説の功績は、教養小説が人文主義哲学的な教養理念によって十分に知れ渡っていた時代にすでに、挫折の可能性を印象的に指し示したことにある。

1800 年頃の教養小説は個人の積極的な発展能力への信頼だけでなく、社会的な状況の変化に対する希望を表明していた。それは、フリードリヒ・ヘルダーリン (1770-1843) の『ヒュペーリオン』 (1797-99) を手掛かりにすれば明らかとなる。主人公の発展は明らかに教養小説の基本構造を満たしている。つまり、ヒュペーリオンはギリシアのある島で成長し、旅を通じて様々な

国民の風習や習慣を知ろうとし、「美しき魂」と呼ばれるディオティーマとの出会いを通じて、墮落退廃した同胞の教育者になろうという計画が彼の中で熟していく。ヴィーラントが小説のストーリーを古代ギリシアに設定しているのに対し、ヘルダーリンははっきりとドイツの政治的な状況、ならびに 18 世紀後期の社会史的な文脈と関連づけている。ヒュペーリオンはトルコ人に対するギリシアの蜂起に参加し、暴力という手段では政治的な目標は達成できないことを認識する。彼は手紙による回顧で、これまでの経験を通じて自分が Dichter へと成熟していると感じ取る。その一方で、ジャン・パウル (1763-1825) は、将来の統治者が同胞の幸せのために如何にして自己形成されねばならないか、という理念を発展させた。彼はヴィルヘルム・マイスターという人物の平凡さに対抗し、彼の小説『巨人』(1800-03)の中で、多大な才能と高貴な心情を持ち、理想的な統治者へと自己を発展させる主人公を選んだ。その際、主人公が有害な影響から守られた田舎の環境で成長しているという点で、ジャン・パウルは明らかにルソーの教育小説を模範としている。『巨人』の複雑なストーリーは子どもの取り違えに由来している。ある侯爵の息子であるアルバーノは、ある伯爵の息子と間違われてイタリアで成長するが、伯爵は彼の内的な資質を認識し、彼を「全体的な人間」へと教育しようとする。主人公は道徳的に墮落した敵対者に対して明確な輪郭を与えられている。アルバーノは完全無欠の人格として発展するが、その一方で彼の友人であり対蹠者であるロケロルは内面的には空っぽのマスクを被った人間であることが明らかである。ロケロルは変装してアルバーノの恋人を凌辱する。ロケロルはその犯罪行為を如実に描写する演劇を舞台上で上演し、上演中にピストル自殺するのである。舞台はゲートにおいて自分を試すためにあったが、『巨人』においては演劇的な仮象存在の仮面を剥がされる場所であって、ここで主人公は無道徳性や墮落性を学ぶのである。主人公が最後に自分の本当の素性を知ると、フランスの革命家を支援するという計画を取りやめ、ドイツの小国家の統治を受け継ぐことになる。ジャン・パウルの『巨人』はすでに 19 世紀には教養小説の確たる聖典のひとつとなっていた。なぜならこの小説内では、策略を見抜き、自らの倫理性によって統治者であることを証明できる主人公が具体化されているからである。

1800 年頃には『修業時代』に刺激を受けた小説が多く出版された。小説が最も重要な文学ジャンルとなったロマン主義の作家たちは、『修業時代』の中の様々な要素(詩や人間関係の混乱)に魅了されていた。しかし彼らはいくつもの断片のまま残った作品の中で、このジャンルの構造を修正していった。教養小説にとって典型的であった主人公の旅行が、様々な人物との出会いによって主人公に有機的に作用する段階へと続いてはいかなかった。むしろ、これといって珍しくない目的のない旅は、秘密めいた童話的な世界へと進入し、そこでは主人公はこれまで発見できなかった関心をもって自分自身を知るのである。Bildung の手段である芸術も、もはや単に新しい社会的な立場へ至る移行段階ではなく、主人公の本来的な存在(Sein)を際立たせるものとなっている。このようにロマン主義の教養小説の主人公は、しばしば芸術的な理想へ向けての探

索を行っており、見知らぬ人たちとの邂逅や愛の経験を通じて、自らの素性の謎と対決させられるのである。

ルートヴィヒ・ティーク (1773-1853) の断片『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』(1798) では主人公の Bildung の過程とともに、ロマン主義の芸術観も展開されている。若き画家フランツ・シュテルンバルトは彼の親方であるデューラーのもとを離れ、オランダへ、それからルネサンス最盛期のイタリアへ向かう。彼は放浪生活を送る旅の途上で様々な Bildung の段階を潜り抜け、その結果彼の中に新しい芸術観が芽生えていく。風景描写、芸術鑑賞、物語、詩が収められた断片的なこの小説は、ロマン主義の絵画や芸術理論に大きな影響を与えた。なぜならこの小説では初めて、ロマン主義に特徴的な風景のアレゴリー化や無限への憧れがテーマ化されたからである。それとは逆に、この時代の小説に典型的な人物関係をめぐる混乱劇は、クレメンス・ブレンターノ (1778-1842) の『ゴドヴィ』(1801) の中で徹底的に推し進められた。『修業時代』に着想を得たこの作品は、重なり合った構造と頻繁に起こる語りの交代によって、ロマン主義の最も混乱した小説と見なされている。この小説には、ロマン主義の教養小説の二つの基本的傾向が表れている。それは、過剰な可能性の中で進むべき道が分からないという不安と、すべての死活問題が幸福な偶然によってひとりりで解決されるという希望である。矛盾が調和するという傾向は、特にノヴァーリス (1772-1801) の『青い花』(1802) において明らかである。死後に発表されたこの断片は、夢想的な青年の Bildung の過程を描いているのであるが、彼は旅を通じて詩的・童話的・象徴的なやり方で彼の内部に反響する経験領域へ移行し、作家へと成熟して、世界をその実務的な硬直状態から解放するのである。

多くの教養小説の本質的な特徴は、主人公が感情を陶酔的に試し、官能的な冒険の中で幻滅を覚えるような経験によって成熟し、最後には、道徳的な完璧さや生活能力によって際立つ一人の女性へと向かうことにある。それ故に、Bildung の過程において克服されるべき挿話である官能的に誘惑する女性像が、市民的な生活態度に相応しい女性像、またはミューズへと理想化された女性像と対置させられることは珍しいことではない。この分裂した傾向を、フリードリヒ・シュレーゲル (1772-1829) は断片『ルツィンデ』(1799) において、新しい愛のイメージを通じて克服しようとした。満たされた結婚生活をしているという幸福を確信して、主人公のユーリウスは、妻ルツィンデに自分の結婚前のエロティックな冒険について報告する。その一方で彼は、官能的・肉体的な愛と精神的・心的な愛が統一するという結婚の理想を述べている。

E・T・A・ホフマン (1776-1822) の小説『雄猫ムルの人生観』(1819-21) は、19世紀初期の教養小説人気の多弁な証拠と見なされている。教養小説の構造的特徴はすでに当時の読者には知られていたが、ホフマンは彼の小説で教養小説を戯画化したのであった。この小説は、互いに引き離されているが絡み合ってもいる二つの物語から構成されている。ひとつは雄猫ムル自身によって物語られるムルの生涯である。もうひとつはヨハネス・クライスラー楽長の伝記の断片である。

この二つの生涯の混ぜ合わせは、雄猫がクライスラーの伝記のメモの裏側を自分の執筆のための下書き用紙として用い、植字工が誤ってこの原稿を部分的に印刷したからである。ムルの自伝では、教養小説の段階的発展を皮肉りながら、「青春の歳月」、「若者の人生経験」、「修業の歳月」、「男の成熟の歳月」について報告されている。ムルの型どおりの Bildung が本能に導かれた振る舞いによって何度も中断されるという点で、Bildung の理念はイロニー化されているのであって、ムルの報告は市民的な Bildung の努力、ならびに理想的な Bildung の理念を過大評価することを嘲笑しているのである。それに対してクライスラーの部分では、俗物的な社交界におけるロマン主義の芸術家の問題のある立場や、宮廷の慣習に対する批判が描かれている。統一性を持った Bildung の物語が可能であるという信仰が崩れ始めていることを、ホフマンのパロディー風の脱構築は示している。

こうしてゲーテも彼の教養小説の第二部である『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1821)では、有機的な全体性へ向けて段階的に完成していく Bildung のモデルをあきらめ、主人公のヴィルヘルムを多層的な参照関係の中へ置いたのであった。ヴィルヘルムの息子は「教育州」で教育される。この教育は新世界へ移住を果たすための能力へと向けられている。ヴィルヘルム自身は公益に奉仕する職業に就くことを公言し、外科医になるための教育を受ける。この小説は、後続の小説にとって重要なテーマとなる社会的改変プロセスを暗示している。市民階級の政治的な無力さと増大する産業化の圧力を目の前にして、自己実現の可能性が強く問われている。以前のロマン主義の理想世界では可能に思われた自己経験は、ますます隠棲への逃避に陥っていく。こうした傾向はすでにヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ (1788-1857) の小説『予感と現在』(1815)に見て取ることができる。この小説では、若き主人公は勉学期間の後、旅の途上で様々な経験へと導かれ、諦めて修道院へひきこもった時に人生の諸関連を解明することができる。ゲーテの亡くなった年に初校が出版されたエドゥアルト・メーリケ (1804-1875) の『画家ノルテン』(1832)は芸術家の生涯を扱っているが、この作品は芸術創造がもはや独創的で天才的なことではありえないという理想主義後の時代の表現として多層的に読むことができる。芸術によって変化が可能であるという信仰が消え去っていくということを目の前にして、私的な宇宙を作り出そうとする傾向は、アーダルベルト・シュティフター (1805-1868) の『晩夏』(1857)に特にはっきりと見とめることができる。ウィーンの商人の息子であるハインリヒ・ドゥレンドルフはアルプスの調査の際に偶然立ち寄ったリーザッハ男爵の館で、効率的基準ならびに美的な観点によって整えられた生活世界を知ることになる。この小説はその人物造形のために『修業時代』の後継と見られているのであるが、『晩夏』では Bildung のプロセスは理想主義的な前提に基づいており、回り道や過ちもなく描かれている。ノヴァーリスの『青い花』では衝突のない発展が詩的に理想化された世界の中で行われ、ロマン主義的な詩学と結びついている一方で、シュティフターは、産業化と商業化によって刻み込まれた近代社会の崩壊現象から隔絶した理想化さ

れた生活世界を描き出したのであった。

模範的な人生の歩みを形成していくことは古典主義後の時代には疑わしくなっていた。そのことはすでにカール・レーベレヒト・インマーマン (1796-1840) の『エピゴーネン』(1836) という小説のタイトルが暗示している。この小説では模倣することによってゲーテの教養小説に接続するという試みがなされており、実際、主人公ヘルマンはヴィルヘルムのように自分が好まない実践的な職業から逃れるために旅に出て、ミニヨンやナターリエを思い起こさせる女性と出会っている。しかし主人公は過去の価値観のために自分の方向性を見い出せず、新しく始まる時代の中でどうしたらいいのかわからない。それに対してグスタフ・フライターク (1816-1895) は『借りと貸し』(1855) の中で、教養知 (Bildungswissen) によって社会的な上昇が可能であるという 19 世紀後半を絶えず貫いているイメージを具体的に描いた。ある小役人の勤勉な息子が名声のある商会で経験するのは、何が裕福な市民層を事実上国家の第一階級になるように定めるのかということである。それはつまり絶対的な労働倫理である。市民的な幸福と名声へと至るために障害を取り除かれた自己形成の中で、彼はこの労働倫理に縛られている。ヴィルヘルム・ラーベ (1831-1910) の小説『飢餓牧師』(1863/64) では、バルト海の小さな漁村で「飢餓牧師」を引き受けている野心的な靴屋の息子の上昇が描かれている。主人公の発展の歩みに対して調和的な結末を拒んでいる小説のために用いられている「アンチ教養小説」という概念は、意義深いことにフライタークやラーベのような小説に適用できる。なぜなら、ここでは主人公たちは反省的に市民的な教育基準や規範イメージと取り組んでおらず、自分の暮らしを危険にさらさないために、それらを自ら進んで引き受けているからである。とりわけ芸術は Bildung の手段と見なされておらず、繁栄する市民層によって思い通りにできる知識の意味で扱われている。単に外面的なストーリーという点で教養小説の型を満たしているこれらの小説とは対照的に、ゴットフリート・ケラー (1819-1890) は初版が 1854/55 年に出版された『緑のハイブリヒ』によって、画家の Bildung の過程をテーマとして扱った。そこではこの時代に何度となく扱われたディレッタントという問題性が映し出され、また同時に克服されている。ケラーの作品によって、教養小説は「内的な物語」と規定されて写実主義時代には交換不可能な刻印となり、20 世紀の多くの作家たちにとって模範を与えるものとなった。

自然主義とともに、子どもの Bildung による上昇というテーマは、伝統的に Bildung からは遠く離れた階層の関心を獲得した。例えばヘルマン・ズーダーマン (1857-1928) は『憂愁夫人』(1887) の中で、倫理的な価値に導かれ、一家の社会的な没落に対して自分を犠牲にしても抵抗する若い農夫の息子を主人公に選んだ。一方、郷土小説においても、範囲が限定された社会的な環境から逃れようとする思春期の息子たちの試みがテーマとなっている。ペーター・ローゼッガー (1843-1918) の小説『荒れ地のガブリエル』(1882) では、荒れ地に住む才能のある農夫の息子の発展と社会的な上昇が物語られている。彼は自己形成を続けるために見知らぬ土地へ行き、

成功した作家として帰ってくるだけでなく、貧しい暮らしをしている両親の責任を持ち、自分の家族の面倒もみるのである。

19世紀の終わりには若い世代の作家たちが作品を発表するようになり、彼らは裕福さや所有へ向けられた(普仏戦争直後の)泡沫会社乱立時代の価値とそれを引き継いだ美的なイメージに批判的に取り組んだ。オットー・ユリウス・ピーアバウム(1865-1910)のパロディー『シュティルペ』(1897)の主人公のシュティルペは、学校での適応圧力に対抗し、ベルネの書物に感銘し革命家となり、アンリ・ミュルジェールの小説『ボヘミアン生活の情景』を読んだ後はボヘミアンとなる。その後彼は自堕落な学生として大学から追放されて、ベルリンで批評家となる。ここでは古典的な教養小説の図式が反転し、酒に溺れ官能的な関係にとらわれて郊外のキャバレーの舞台で最後には死んでしまう落ちぶれた天才シュティルペの人生行路が描写されている。

一方で1900年頃には、伝統的な教育モデルと対決するという観点で教養小説のモデルを取り上げる小説も生まれてきた。集中的に世紀転換期の教育観と取り組んだ作家がヘルマン・ヘッセ(1877-1962)である。『ペーター・カーメンツィント』(1904)で、彼はズーダーマンやローゼッガーのように農夫の息子を主人公に選んだ。この主人公は人里離れたスイスの山村で成長し、文学に取り組むことによって作家になりたいと願うようになる。ケラーの『緑のハインリヒ』を思い起こさせる「緑のペーター」と呼ばれる主人公は、研究と過ちによって特徴づけられる発展の後に村に戻り、そこで共同体のために活動するようになる。主人公は、教育者たちを通じて自らを解放し、前もって作り上げられた道から逸れたところで自己形成したいという絶対的な願望を抱いている。こうしたことは教養小説との親近性を示している他のヘッセの小説にも見られることである。例えば『デーミアン』(1919)において、厳格な道徳的・宗教的教育に刻印された一人称の語り手エーミール・ジクレールの子供時代と青春時代が記述されているが、彼は同級生デーミアンに大きく感化を受ける。主人公の人生行路を決定する人物たちは、彼自身の内面のレイアウトとして作られており、そのことを彼は心的な全体性を実現するために自覚していくようになる。ヘッセの『ガラス玉遊戯』(1943)において、才能もあり批判精神もある生徒ヨーゼフ・クネヒトは、文化のあらゆる価値と内容を備えたガラス玉遊戯へと導かれる。その遊戯において、世界の統一と和解へ向けた人間の願望が描写されている。Bildungの必要不可欠な酵素としての自己反省は、虚構の履歴書を毎年書くというガラス玉遊戯者宗団での義務によって目に見えるようになっている。

主人公たちがもはや性格形成的(charakterbildend)ではなくむしろ自己反省的(selbstreflexiv)なBildungの過程を駆け抜けている傾向は、20世紀の多くの小説に目に見えて強くなっている。その際立った例は、ローベルト・ムーヅル(1880-1942)の未完の小説『特性のない男』(1930-43)である。この小説では「内的な物語」が繰り広げられているのだが、そこでは現実世界に対して自分の能力を実証しようとする試みが重要な意味を獲得している。立派な男になろう

という試みが満足のいく結果に終わらなかった主人公ウルリヒは、平凡な現実よりも可能性の方が彼には重きをなしていることを認識する。古典的な教養小説の主人公とは異なり、ウルリヒは哲学的・精神的・自然科学的な論議を一つに融合させる瞬間へ向けて自分自身を発展させる。トーマス・マン (1875-1955) の『魔の山』(1924) は20世紀の最も重要な教養小説のひとつと見なされている。ハンブルクの上流階級の市民の息子であるハンス・カストルプは、ダヴォスのサナトリウムに肺を病んだ従兄弟を見舞い来た際に無時間の状態に置かれ、最後に戦争に行くまでの計7年間、スイスアルプスの隔絶した生活にとどまる。特にこの小説は『修業時代』に対するマン自身のコメントによって、第一次世界大戦前の思考形式に対する明確な批判を表した教養小説として幾度も解釈された。

しかしながら、様々なエッセイの中で教養小説の構造とその意味に取り組んだトーマス・マンは『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(1954)によって、教養小説の戯画化作品を書いたのであった。この作品では、多方面のBildungという人文主義的な理想が利益をもたらす偽装であるということが暴露されている。つまり、破産したシャンパン製造業者の息子であるフェーリクスはある侯爵とその存在を交換し、その侯爵の書類と財産によって見聞旅行を引き継ぎ、貴族社会へ入会し、ある教授の娘を獲得するのである。ホフマンの『雄猫ムルの人生観』やビーアバウムの『シュティルペ』におけるように、そのBildungに対する考え方はイローニッシュに徹底検証され、詐欺行為の中に彼本来の仕事を見つける芸術家の発展が描かれている。ピカレスク的な物語形式を顧慮すれば、ギュンター・グラス (1927-) の『ブリキの太鼓』(1959)も教養小説のパロディと理解できる。なぜならば一人称の語り手であるオスカー・マツェラートは、三人称で書いた彼自身の人生の思い出を、すぐに悪漢小説にしてしまうからである。主人公は彼自身の抵抗を表現できる太鼓を三歳の誕生日にプレゼントしてもらおうと、もう成長しないと決め、世界を小人の視点から観察する狡賢いジンプリティスムスになる。この小説は確かに主人公の発展を止めていることで、国家社会主義時代におけるBildungのプロセスを拒絶しているのであるが、同時に罪を負った過去を思い起こすことによってBildungの道を作り出しているのである。

ヘッセやマンのように、ペーター・ハントケ (1942-) はその物語作品において幾度も教養小説の構造とトポスを関連させている。『長い別れを告げる短い手紙』(1972)の中には、カール・フィリップ・モーリッツの『アントン・ライザー』からの引用があるだけでなく、主人公はアメリカを縦断する放浪旅の途上ケラーの『緑のハインリヒ』を読んでおり、また彼はそれを通じてこれまでの生活について反省し、同時に自己中心的な考え方を克服することになる。またハントケの『ゆるやかな帰郷』(1979)においても、アメリカ縦断の旅と結びついた自己発見の過程が扱われている。この著者の小説群は、主人公たちが迷いながら探し求める旅路を通じて当初のアイデンティティーの危機を克服し、新しい自己理解へと到達するという点で、教養小説の「内的

な物語」を首尾一貫して取り上げている。シュテン・ナドルニー (1942-) の小説『緩慢の発見』(1983) も教養小説と比較される。物語られているのは極地研究者ジョン・フランクリンの生涯で、彼は始まりつつある工業化時代の慌ただしさに対して落ち着いて自分の能力を發揮して研究調査を行い、北西航路を探し出すのである。ナドルニーは、速さへの要求に逆らうが、まさしくそうすることによって交換できない個性を形成できる主人公を描いている。ポート・シュトラウス (1944-) の小説『若い男』(1984) も教養小説と見なされている。主人公は父親の意志に逆らって演劇の道に進み、15年後に幻滅して日常性の強制の中で死ぬ。演劇に向き合う主人公や「塔」と表題を付けられた最終章などは、はっきりとゲーテの『修業時代』を思い起こさせる。全体的に男性の主人公が中心にいる教養小説に言えることは、主人公が自己反省し迷いながら探し求めているも、「全体的な人間」というイメージの喪失が明らかな Bildung の過程が描写されるようになっていくということである。しかしながら同時に、模範を与えるような 18・19 世紀の教養小説への方向は、最近になるまで失われず残っている。このジャンルの要素とトポスは、変化した社会的な関係や個人的な要求に応じて、革新的な方法で何度も取り上げられる。それ故に、多くの小説においては、それらがジャンルの型を全面的に満たしているかどうかはそれほど重要ではなく、むしろそれらがいかに生産的にこのジャンルと取り組んで、新しい Bildung のイメージの輪郭を描いているかが重要になってくるのである。

2. 女性の教養小説の始まりと展開

20 世紀の終わり頃から女性作家の小説はますます学問的研究の対象となっていった。1770 年から 1810 年の期間、つまり教養小説の黄金時代に関して言えば、これまでおよそ 80 人の女性作家の 500 もの小説が研究されてきた⁽⁷⁾。その際、女性の教養小説も確認できるかどうかという問いが投げかけられた。しかしこの問いを、意味あるように立てることができるだろうか？ 彫塑性の理念について、そして一貫して男性の主人公の多様な自己探索の望みがテーマとなっている教養小説についてこれまで見てきたが、時代の Bildung の概念は男性の思春期の段階に向けられていた。自由な自己探索という意味での Bildung は 20 世紀後半に至るまでは、ただ男性の成熟過程の中に数え入れられていた。旅行、異性との交際によって経験を積むこと、様々な人生の可能性を試す思春期、そういったものが女性には存在しなかった。女性に対するこれまでの教育は、出身領域以外での自己試練と結びついていまいし、批判的な考え方を育てることに向けていない。Bildung は女性にとって、女性という役割に向けられている期待に相応しく自己を形成すること、前もって与えられた道徳規範に従って自己を鍛えることを意味していた。

しかしながら、女性たちの Bildung への要求を表現することはまさしく文学には可能であった。すでに何名かの女性作家は 18 世紀には自分の小説をしばしば匿名で発表し、その著作によって「教養人」に数え入れられていた。これらの女性たちは女性の Bildung の雛形と批判的に取

り組んだと推測するのは当然の流れである。すでにモルゲンシュテルンも教養小説を考察する際に、「家族小説」を通じて現れてきた女性作家たちの名前を挙げていた。モルゲンシュテルンは『シュテルンハイム嬢物語』のゾフィー・フォン・ラロッシュ、カロリーネ・フォン・ヴォルツオーゲンの小説『アグネス・フォン・リーリエン』、カロリーネ・ピヒラーの小説『アガトクレスとその他の物語』やヨハンナ・ショーペンハウアーの『ガブリエーレ』、またテレゼ・フーバーとファニー・タルノウの小説を挙げている⁶⁾。以下、上に挙げられた小説を中心にしながら、女性の主人公が登場する「女性的教養小説」について説明していくことにする。

ゾフィー・フォン・ラロッシュ (1730-1807) の書簡体小説『シュテルンハイム嬢物語』(1771) では、如何にして主人公が試練や迷誤を越えて同時代の美德要求に合致しようとするかが描かれている。この書簡体小説は、田舎の領地で女性的な美德基準に従って入念な教育を受けた若きゾフィー・フォン・シュテルンハイムについての物語である。両親の死後、彼女は都にいる叔母のところへ行くように強いられるが、この叔母は彼女を侯爵の側室にと差し出そうとしている。牧師の娘エミーリアとの活発な往復書簡が、宮廷社会の誘惑や欺瞞に対抗するのに役立っている。イギリス大使秘書で感傷的な青年シーモア卿へのひそかな愛は、厳しい試練を強いられることになる。なぜならゾフィーは宮廷の陰謀によって側室の噂を流されてしまい、前から彼女を手に入れようと策をめぐらしていたダービー卿と結婚することになるからである。その後彼女は重い病気になり、友人の支援を受けながら田舎へ帰る。彼女は少女たちの教育者となり、それからイギリスに渡るが、そこで彼女はダービー卿によって誘拐され、スコットランドに幽閉されてしまう。しかし最後にゾフィーは立派になったシーモア卿と結婚し、二人の息子を得、田舎で幸福な生活を営むのである。

リチャードソンの恋愛小説や試練小説という図式がラロッシュの心をとらえ、それが彼女を女性的な発展小説や教養小説の方向へと向けていった。ゲーテ、ヘルダー、レンツのような同時代の作家たちに賞賛された『シュテルンハイム嬢物語』は、美德の原則に従うことによって、宮廷の陰謀や自堕落な誘惑の試みに対して美德のある教育をしようとする女性の主人公を中心に置いている。ここでははっきりとルソーの教育小説のモデルに従って、市民的・美徳的な生活と、宮廷の道徳の崩壊が、田舎と都が対比されて描かれている。ちなみに誘惑された無垢というトポスは、これ以降の小説においても何度も取り上げられる。この時代の教養小説の主人公にとって旅が内的な成熟のプロセスを際立たせるのであれば、こうしたことはある意味ではゾフィーにも当てはまる。彼女は両親の家からプロテスタントの牧師の家へ、そこから宮廷へと転々とし、宮廷では悪習と陰謀に直面する。彼女は教育的な活動をし、イギリスで彼女が望んだ家庭生活を見つけるまで幾度も試練に立たされる。男性の主人公には Bildung の過程において伝統的な価値との対決が課されている一方で、ゾフィーは両親によって仲介された価値や慣習に忠実であろうとしている。しかしながら彼女は自分が犯した無邪気な過ちから学び取り、自分の人生経験を若い

女子の教育に生かしている。教育的な書き込みが全体を貫いているこの小説は、女性の教育の基本問題を具体的に示している。それは、美德規範をただ知っていることが人生を営む上で十分ではなく、経験や反省を通じて初めてナイーブな理想イメージが修正されるということである。

テレゼ・フーパー (1764-1829) の小説『ルイズ』(1796) では、主人公ルイズは恵まれた生活環境にある市民的な両親のもとで成長し、植物学へ興味を抱き、父親の図書室の中に自己形成の場所を見つける。父親の死後、ルイズは伝統的な役割概念に縛られている母親によって、怒りっぽい将校との結婚へと急き立てられる。この結婚はこの若い女性には苦難以外の何物でもなかった。最後にはルイズは彼女の子どもを新しい原則によって成長させるという決心を抱いて田舎に引きこもる。架空の編集者による前書きにおいて述べられているのは、この小説が、世間的な慣わしという束縛から自らを解放するように人々を勇気づけるという目的で、医者 の勧めによって女性の主人公によって書かれた自伝的な報告ということである。多くの議論を巻き起こしたこの小説はアンチ教養小説と見なされており、気分の沈んでいるこの主人公はモーリッツのアントン・ライザーと女性的な対をなしていると考えられている。ヨハンナ・ショーペンハウアー (1766-1839) の小説『ガブリエーレ』(1819/20) もまた、母親の死後、叔母によって上流社会へ引き込まれ、不幸な恋の後、本来は従兄弟である男とお膳立てされた結婚に同意する若い女性貴族の人生行路について物語っている。この時代の多くの小説に見られるように、ここでも諦念が浮び上がっている。なぜなら彼女はある別の男に恋をしたとき、自分の身分に相応しい結婚から自分自身を解放することができないからである。

それに対して、ゲーテの『修業時代』と徹底的に対決したゾフィー・メロー (1770-1806) は『マリー』(1798) の中で、田舎の人里離れたところで成長し、ある名人の偶然の訪問によって、父親の意志に反してリュートの演奏の才能を磨くよう勧められる女性の主人公を描いた。自分自身の人生を切り開くという無条件の願望に導かれ、マリーはこの時代の多くの教養小説の主人公に匹敵できるほどに、自己試練の段階や、批判的に自分の裏側を探るという段階を体験する。ある裕福な貴族男性との情事のあと、マリーは女優として自分の力を試し、最後にはある芸術家と結婚する。マリーは外側から持ちこまれた道徳的な要求に反対し、自分の芸術的な資質を形成することを優先している。彼女は様々な発展の過程を体験し、そうすることによって、当時の他の小説で何度も扱われたような女性の犠牲的役割 (Opferrolle) から明確に区別されている。

しかしながら、男性の支援者によってだけではなく文学によっても、抑圧された家族関係からの逃避は成功している。こうしたことは特にフリーデリーケ・ヘレーネ・ウンガー (1751-1813) の『ユルヒエン・グリュンタール』(1784) において示されている。「ある寄宿学校の物語」という副題のついたこの小説は、1800年頃非常に叱責された「読書熱」を取り上げ、女性の教育における読書の影響をテーマとしている。ユルヒエンは田舎の隔絶された空間の中で美德へ至るよう教育され、ベルリンの寄宿学校でルソーの『ジュリ、または新エロイズ』(1761) を自己

同一化しながら読むことによって、美徳的な教育の原理から遠ざかり始め、道徳的な過ちを次々と体験する。つまり、ユルヒェンは若い士官と恋愛関係になり、牧師と結婚させようとする父親の提案をはねつけ、ゲーテの『シュテラ』(1776)に感銘を受けて彼女の叔母の結婚生活を壊してしまい、最後にはあるロシアの侯爵とともにこの国の境界を越えて逃げ出してしまうのである。読書の作用と並んで、フランス革命の自由の理念や解放の努力が1800年頃には女性作家たちによって何度も取り上げられた。フーバーは『ゼルドルフ家』(1795/96)において、女性の役割に対する極端な拒絶を描いている。田舎に引きこもって父親から高い美徳の要求に従って教育されたザラ・ゼルドルフは、妊娠して恋人から引き離される。ザラは男装して革命の闘士となり、彼女の実の娘を失ったにもかかわらず、自らが「社会的な母親という存在」であることを公言する。彼女はかつての恋人の息子を引き取り、彼女に長い間好意を抱いていた友人からのプロポーズを拒否する。この小説は、まさしく綱領的に、女性の役割交換の可能性が1800年頃の文学において変化するさまを描き出しているのである。

新しい役割 男装であるのは珍しくはない を引き受けるという試みは、大抵は旅と結びついている。ドロテア・シュレーゲル(1763-1839)は『フロレンティン』(1801)において、ゲーテの『修業時代』、とりわけ夫であるフリードリヒ・シュレーゲルの断片『ルツィンデ』と徹底的に取り組んだ。若き画家フロレンティンが主人公で、その冒険的な放浪生活が詳しく物語られているにもかかわらず、ドロテア・シュレーゲルはこの小説に断片的に女性のBildungの過程を組み込んでいる。ユリアーネは男装し、フロレンティンと彼女の婚約者エドゥアルトの遠出に同行し、遊び半分に新しい役を試してみるが、最終的にはあらかじめ彼女に決められた身分相応の生活にとらわれたままである。あちこち彷徨っているフロレンティンが束縛されず自己探索に取り組みたいという青年期特有の願望を代弁している一方で、彼女は家族の伝統と自由な人生形成への願望の間で気持ちが切り裂かれている。メローの『感情の全盛期』(1794)において、一人称の語り手であるアルベルトはイタリアを旅行しているとき、女性の主人公ナネッテと出会う。シュレーゲルの『ルツィンデ』やヘルダーリンの『ヒュペーリオン』の女性の主人公にも当てはまるように、彼女はその振る舞いにおいてアルベルトにとって見本となっている。フランス革命を背景としてナネッテはアルベルトと同じ権利を要求し、自分で決めた生活を送るために、最後には彼とともにアメリカへ行くのである。

女性の主人公の登場する小説において、とりわけイタリア旅行が模範的にBildungに役立っていることは、フリーデリーケ・ヘレーネ・ウンガーの『本人によって語られた美しき魂の告白』(1806)に明らかである。ルソーの『告白』やゲーテの『修業時代』に挿入された物語と関連して、ウンガーはここで女性のBildungの物語を物語っている。牧師の里子として成長したミラベラは幼い時から文学に興味を持ち、フランスの古典作家や啓蒙主義者の書物を読んでいる。彼女はイタリアの作家に熱中している親友の兄に恋心を抱く。しかしこの男が戦死すると、ミラベ

ラは王女の付添役として長期にわたるイタリア旅行に出る。王女の死後も彼女はイタリアにとどまり、完全に文学に取り組むことになる。それに対してイーダ・ハーン＝ハーン (1805-1880) が『伯爵夫人ファウスティーネ』(1841)において描いたのは、粗暴な伯爵との不幸な結婚生活の後、父親の友人に同伴したイタリア旅行の途上で自らの芸術的な創造性を発見し、安らぎのない生活を過ごしたのちにローマの修道院に避難所を見つける女性の主人公であった。地位の高い若い男性には必須であった Bildung のためのイタリア旅行は、女性の主人公の登場する小説においても抑圧された関係から逃げ去るためのチャンスとなり、その際、旅行を通じて、独自の生活へ至るための方向転換が生じるのである。

心身を擦り減らし、危険に満ち、失敗に終わるかもしれない女性の主人公の Bildung の試みが描かれた小説が多く世に出たのち、世紀転換期には決然と Bildung の問題性と取り組む小説が多く出版された。19世紀までは Bildung の機会は主として旅行によって形成されていた。その一方で、いまや芸術的で知的な Bildung が中心的な位置価値を獲得することになる。書くことによって集中的に女性の Bildung の願いに取り組んだ傑出した女性作家の一人がルー・アンドレアス・ザロメ (1861-1937) である。小説『ルート』(1895)において彼女は、教師の教育的要求に反対して、自由な自己発展を求める知的好奇心に溢れた女子生徒の Bildung の歩みを描いている。幼くして孤児になったこの女子生徒は、知識を求めることにおいて、彼女の知的な支援者に完全に身を委ねる。教師は才能のあるこの女子生徒に対して感情的に緊密な関係を構築し、彼女に愛を告白する。その後彼女はこの教師から離れ、自分の Bildung の歩みを自主的に進めていくことを決心する。この小説は1900年頃の教育改革運動の文脈にあり、教師からの投影的な干渉に打ち勝つよう女性の主人公が強いられている、極めて重要な例なのである。

Bildung の努力がしばしば自分が生まれ育った家庭との断絶によって置き換えられるということは、フランツィスカ・ツー・レーベントロー (1871-1918) の小説『エレン・オレスチュルヌ』(1903)に明らかである。この小説は教養小説の型に従って、幼い子ども時代から思春期を経て自分の職を見つけ母親になるまでの、ある貴族の娘の経歴を描いている。両親との言い争いの多かった子ども時代の後、エレンは不服従が原因で女子寄宿学校から放校処分され、矯正滞在として牧師館へ入れられる。教師になるための修業と、結婚生活の失敗の後、彼女は最後に絵画に取り組み、ボヘミアンの生き方を送る。この小説は、貴族出身の女性主人公の下位文化への発展の歩みによって、上昇志向、社会統合、性別の関係について教養市民層が考えていたことに対する反対構想となっている。

市民による女性運動と女子学生への大学門戸開放という決然たる Bildung の要求を背景にして、女性の解放要求と芸術的な自己実現の願望、そして Bildung への努力がテーマとなっている小説が多く出版された後、1960年代になって初めて女性の教養小説が価値を認められ始め、女性の Bildung による上昇は文学の主題となっていった。性別に付与された役割が社会的に変

遷していく様子をはっきりと登場人物の考え方の中に表れ、伝統と結びついた女性観や両親に反対して、自分たちの Bildung の願望を勝ち取る女性の主人公がしばしば描かれるようになる。しかしながらとりわけ、その Bildung の歩みが描かれるだけでなく、この自己発見の社会心理的な原価の背景が何であるかが調べられる。

クリスタ・ヴォルフ (1929-) の『クリスタ・T についての追想』(1968) において、一人称の語り手は、自らの Bildung の歩みと作家としての成長の歩みを、早逝した友人 (クリスタ・T) についての内的な対話の中で反省している。半ば理想主義的、半ば日和見主義的に社会主義国家の建設に協力している学生たちの中で、クリスタ・T は与えられた関係に対して距離を取りアウトサイダーにとどまりながら、精神的な挫折を経てようやく自分の学業を終える。彼女は短い間教師として働き、結婚し子どもを二人生んだ後、作家になりたいという決心を実行に移すこともできず、1963 年には白血病で死んでしまう。前もって与えられた行動パターンに適應することのない女性の主人公の完結しなかった Bildung の歩みを描写することで、この小説はこれまでの東ドイツ文学にはないような方法で批判的にその立場を明らかにしている。女性の Bildung の過程を描写することで西ドイツで注目された東ドイツの小説に、ブリギッテ・ライマン (1933-1973) の『フランツィスカ・リンカーハント』(1977) がある。死後に発表されたこの断片はある若い女性の人生行路を扱っているが、彼女にはいわゆる女性的な美德が最初から制限や制約として表れているので、性別に付与された役割に対して徹底的に逆らっている。フランツィスカの自己発見のプロセスは、まず最初に市民的な両親の家から、すぐに別れることになる暴力を振う労働者との結婚生活へと続き、建築学を学ぶことで自分を新たに発見する。職業生活へ入っていくことで、野心溢れる主人公は形式主義の怠慢と周りの実用主義と対決させられる。しかしながら、フランツィスカは男たちの間で右往左往しながら自分の職業活動を通して自分の生き甲斐を見出そうとするのである。

ウラ・ハーン (1946-) の小説『隠された言葉』(2001) は、労働者階級の女の子の Bildung の過程について述べている。語り手が自らの子ども時代や少女時代を思い起こしながら繰り広げている Bildung へ至るための能力は、ファンタジーの才能、言語への感受性、文学の素質によって決定づけられている。ヒルデガルト・パルムという名の主人公の Bildung の歩みは、文学の世界への段階的なイニシエーションに似ている。教養小説の伝統を強く関連させているハーンの世界は、女性の教養小説も定着しえたということの傑出した例と見なすことができる。

3. インターカルチャー的教養小説への展望

ドイツは 1950 年代高度成長期に突入し労働力の不足が生じた。そこで諸外国から国家間協定に基づき労働移民の募集を開始した。そのような移民としての背景を持つ作家たちによって、1980 年代以降ドイツ語による小説が書かれていった。とりわけ、ドイツ語の体験、統合の試み、

教育上の努力とそれによって上昇していくことへの可能性、そういったものが文学のテーマとなった。様々な文化的コンテクストの間で主人公が自己探索を行う、いわゆる移民文学によって特に明らかになってくるのは、インターカルチャー的教養小説と呼ばれうる、これまでは書かれてこなかった教養小説の特別形態が存在するということである。主人公たちは地理的な空間を遍歴するだけでなく、彼らは移住先の「目的文化」と対決し、自分たちを社会生活に適應させるために、文化的コンテクストの変更を迫られる。インターカルチャー的教養小説の特徴は、例として移民文学の小説の中で明らかにされうるのであるが、ここでは主人公は「二つの文化に挟まれた存在 (das Zwischen-Zwei-Kulturen-Sein)」として新しいアイデンティティーを探している。

インターカルチャー的教養小説では、人生の経験を表明するために特殊な隠喩法が形成されていった。その一方で人目を引くのは、ドイツでの生活が合間、または第三空間での存在として把握される数多くの空間メタファーである。「旅行」による言語の変化もまた、移民文学においては多方面から記述されている。特に舌は好んで用いられ、言語的な順応過程のメタファーとして組み込まれている。母語と外国語は互いに対立し合い、ときには結びつきながら新しい調音手段へと融合される。この新しい言語において初めて、自らの文化的な刻印に対する反省が可能となる。また主人公の自己探索はしばしば、外見上はナイーブだが、文化的関係を知らないピカレスク的な語りの視点によって導かれる。

教養小説が語りの型 (Erzählmuster) として選ばれたことは、特にアレフ・テキナイ (1951-) の『泣いているザク口の実』(1990) において明白である。彼女の童話のような芸術家小説は、基本構造や個々のモチーフや言い回しにおいて明らかにノヴァーリスの『青い花』を意識している。オリエント学で博士の学位を取得したばかりのある若いドイツ人男性フェルディナントが、ある夜の夢の中で自分の未来を見て、トルコ人の友人の結婚式のためにトルコへ行く。そこで彼はある本の著者を探し求める。彼がそうするのは、その本によって彼が自分の人生の基本を取り戻すことができたからであった。この若きドイツ人はこの本を書いた国民歌謡歌手を見つけるためにトルコ中をあちこち旅するが、どんな場面でも彼と行き違いになる。最後にフェルディナントは『夜間走行』という出版されたばかりの彼の詩集を送ってもらい、このトルコ人歌手の死をきっかけにラジオで放送された詩の朗読から、自分自身が詩作を続けるという使命を感じ取る。この小説は、ロマン主義的なポエジー観において使用されていた諸々の小道具を、インターカルチャー的教養小説として取り込んでいる。『楽園からの微風だけが』(1993) においてテキナイは、作家となりドイツ中を朗読旅行している際に自分の人生を新しく整理していく、ドイツ生まれの若いトルコ人男性エンギン・エルテュルクの Bildung の歩みを物語った。主人公は二つの文化に挟まれた存在である。なぜならエンギンの家族は、彼の小説の自伝的な部分が赤裸々に述べられていることで彼のことを恨みに思っているからであり、他方で彼は文学サークルで「表看板のトルコ人」として扱われているにもかかわらず、トルコ語を正しく使いこなせないからである。

この小説は「ロマン主義的に変容しながら」、あまりにも和解的な適応で終わる。なぜなら主人公は定評のある作家になるだけでなく、彼を主人公にして彼の本を映画化したいトルコ人の映画製作者とも知り合うからである。

出身によってあらかじめ決められていたと思われていた人生モデルを克服することは、インターカルチャー的教養小説においては、大抵の場合、他文化における子ども時代の思い出を暗に含んでいる。エミネ・セヴギ・エツダマーの小説『人生は隊商宿』(1992)では、トルコでの幼い子ども時代から18歳でドイツへ旅立つまでの一人称の語り手の発展が描かれている。家庭における語り手の成長は、トルコ人の様々な社会階層や文化的背景を知ることになる度重なる転居によって特徴づけられる。祖母の物語やヨーロッパの小説や戯曲を読むことによって、彼女のBildungの歩みは本質的に形作られる。『人生は隊商宿』がトルコ文化・社会へのイニシエーションの物語として、女の子が若い女性へと成熟していく過程を物語っている一方で、次の小説『金角湾の橋』(1998)においては、家庭的な秩序の外側で新しい文化的な意味連関を開拓し、西欧の刻印を押された社会の中で交換不可能な個人として自分を位置づけようと成長していく主人公の困難が描かれている。「今あるがままの自分を完成する」という『修業時代』で述べられた理想を、この主人公は多様な役割交換によって西ヨーロッパの文化空間の内側で達成しようとしているのである。

文化的な環境適応能力という意味においても新しい役割を引き受けることはインターカルチャー的教養小説の本質的な特徴であるが、それはヤデ・カラ(1965-)の小説『セラム・ベルリン』(2003)においても明らかである。トルコの学校に通っていたこともあるベルリン生まれの主人公ハッサン・セリム・カーンは、壁崩壊直後にベルリンで自分の生活を構築しようとする自らの試みについて物語っている。彼は映画の中で、自分の妹を誘拐した犯人を刺殺するトルコの麻薬の売人の役を演じていた。その時の相手役の俳優は彼の異母兄弟であった。その異母兄弟は、彼が生まれてすぐ、彼の父親と東ベルリンから来た女との間に生まれていた。カラのインターカルチャー的教養小説は、イローニッシュな表現で両親世代の価値の脆さを物語っている。またそれだけでなく、この小説は、壁の崩壊後ベルリンで期待された役割を受け入れることによって社会的に、そして映画の世界では芸術的に地歩を固めようとする青年期の主人公のナイーブな試みについて伝えている。教養小説にとって特徴的な劇場というBildungのための手段は、ここでは映画によって置き換えられている。主人公は自分が俳優に向いておらず、旅をして新しい経験を積むことによってさらに自分を磨かなければならないことを認識する。

教養小説の歴史は、男性の主人公が中心にいる19世紀の諸々の小説を聖典化することによって特徴づけられてきた、と最後に言うてよいだろう。そこで物語られているのは、自らの既成存在(Gewordensein)との対決、ならびに特に旅の間の啓発的な経験によって再点検されずにはいられない新しい人生観である。20世紀の物語作品もまだ18・19世紀の聖典化された教養小説

を引き合いに出しているか、またはその雛形やトポスを变形させている。18世紀以降、女性の主人公の登場する小説が現れ、このジャンルの物語の型を試し、1900年頃に新しく戦い取った Bildung の可能性と1960年代以降の教育状況の変化によって、最終的に女性の教養小説は社会的な地歩を固めることができた。教え込まれた基準値を満たすということから、自己決定を行う人生形成へと至るパラダイムシフトが、伝統的な性別による役割と対決しながら、女性の教養小説の中でしばしば描き出されている。それに対してインターカルチャー的教養小説の中では、出身に関する問いや、自らの人生モデルを発展させるという願望がさらに新しい次元を獲得している。インターカルチャー的物語作品は、確かに部分的に並べられることはあったけれども、これまではまだこのジャンルに属するものという観点からは包括的に分析されてこなかった。それ故にさらなる研究が必要とされるであろう。(おわり)

原書

Ortrud Gutjahr: Einführung in den Bildungsroman, 2007.

本稿は第5章「ジャンルの歴史」の要約である。

注 (巻末の参考文献一覧をもとに筆者が作成)

- (1) 林久博: 「[資料] ドイツ教養小説研究の現在 (1) オルトルート・グートヤール著『教養小説概説』」, 『国際教養学部論叢』第5巻第2号 (通巻10号), 中京大学国際教養学部, 2013年, 55-67頁。
林久博: 「[資料] ドイツ教養小説研究の現在 (2) オルトルート・グートヤール著『教養小説概説』」, 『国際教養学部論叢』第6巻第1号 (通巻11号), 中京大学国際教養学部, 2013年, 57-73頁。
- (2) Blanckenburg, Friedrich von: Versuch über den Roman, Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774 mit einem Nachwort von Eberhart Lämmert, Stuttgart 1965, S. 321.
- (3) Morgenstern, Karl: „Zur Geschichte des Bildungsromans. Vortrag, gehalten 12. December 1820“, in: Rolf Selbmann (Hg.): Zur Geschichte des deutschen Bildungsromans, Darmstadt 1988, S. 87.
- (4) Ebd., S. 74.
- (5) Stahl, Ernst Ludwig: Die religiöse und die humanitätsphilosophische Bildungsidee und die Entstehung des deutschen Bildungsromans im 18. Jahrhundert, Nendeln, 1970, S. 151.
- (6) Eckle, Jutta: „Es ist wie ein jüngerer Bruder von mir“. Studien zu Johann Wolfgang von Goethes „Wilhelm Meisters theatralische Sendung“ und Karl Philipp Moritz „Anton Reiser“, Würzburg 2003.
- (7) Gallas, Helga/Magdalena, Heuser (Hg.): Untersuchungen zum Roman von Frauen um 1800, Tübingen 1990, S. 4.
- (8) Morgenstern, a. a. O., S. 94.